近代秀歌

木俣　修

玉川大学出版部

近代秀歌　木俣　修著
町田　玉川大学出版部　1983
300 p　19 cm

1. キンダイシュウカ　al. キマタオサム
sl. 詩歌　Ⓝ 911

木俣（きまた）　修（おさむ）著　KIMATA Osamu
明治39年，滋賀県に生まれる。文学博士。実践女子大学教授，宮内庁御用掛，日本文芸家協会評議員，近代文学館理事等。
代表著作　歌集『高志』『冬暦』『天に群星』『去年今年』他8冊。評論・研究書『人間と短歌』『大正短歌史』『昭和短歌史』『近代短歌の史的展開』『近代短歌の鑑賞と批評』『短歌回向』『忘れ得ぬ断章』『詠嘆の詩歌』『万葉集一時代と作品』『短歌添削教室』『短歌実作指導教室』その他。
現住所　東京都杉並区高井戸東2丁目7－9

近代秀歌

1983年3月25日　第1刷発行©

著　者　木俣　修
発行者　小原　哲郎
発行所　玉川大学出版部

〒194　東京都町田市玉川学園
電話　0427-28-3213
振替　東京　8-26665番
印刷・製本　図書印刷
(分)2092　(製)11661　(出)4355

乱丁・落丁本はお取替いたします

はしがき

明治になって、急速に海外の文明文化が移入され、いわゆる文明開化の世が到来したのであるが、それにつれて文学の上にもいろいろ新しい動きが示されはじめた。

まず韻文界では十五年（一八八二）に新体詩という新しい詩のジャンルが、『新体詩抄』の成立によって確立され、散文界では二十年（一八八七）、二葉亭四迷の『浮雲』が出て近代文学の黎明を告げることになった。だが短歌における新しい動きを見るのはそれらに後れた。二十数年の間歌壇は桂園派その他のいわゆる旧派の跳梁にゆだねられていたのである。もっとも二十年前後から和歌改良論の名による論議はかなり行われていたのであったが、それを実作の上に移すまでには至らなかったのである。落合直文のあさ香社結成の二十五年（一八九二）をもってようやく短歌革新の緒につくことになった。しかし微温的な直文の歌論ならびに実作をもってしては、まだ近代の到来とはいいがたかったのであって、それはその前夜とでも呼ぶのが適切であろう。近代短歌の真の開顕は、あさ香社の社中であった与謝野鉄幹（寛）の浪漫主義運動によってなされたと見るべきである。彼が新詩社を結び、雑誌『明星』を創刊したのは三十三年（一九〇〇）であるが、その数年前以来、彼は旧派の攻撃を続け、自ら革新的新作を発表して来ていた。しかし情熱的で反抗的破壊的な真の浪漫歌風を確立するためには若い世代の作家にまたなければならなかった。ここに与謝野晶子、吉井勇、北原白秋、石川啄木らの登場となるのである。晶子の人間讃仰、恋愛至上主義的な歌声を先声として、『明星』歌風は日露戦争をはさんで明治四十一年ごろ

までの歌壇の主潮をなしたのである。勇は青春の欲情を自由無礙に歌い、白秋は短歌に西欧の近代詩の香気を誘引して官能の愉悦を歌い、啄木は浪漫世界から脱出して実生活の苦悩を歌い、やがて社会主義的な傾向を辿って、生活派の開拓者となった。

この浪漫派の革新運動に対して、子規は革新の基盤を万葉集に求めて客観写生を主張し、現実主義的な方向をとった。彼が根岸短歌会を結成したのは三十二年(一八九九)であって、新詩社成立より約半歳先んじているが、時代の風潮にそぐわなかったがために大きくあらわれることがなかった。その門に伊藤左千夫、長塚節が出て、それぞれ写生歌風を継承発展させ、前者は重厚、後者は清澄の歌調を奏で漸進的にその派の地歩を固めた。四十一年左千夫が同志と共に創刊した『アララギ』には、島木赤彦、斎藤茂吉、古泉千樫、中村憲吉らの俊秀が集った。赤彦は冷厳な写生歌を完成し、茂吉は浪漫派の精神をもその歌風に摂取しつつ、強烈に生命の真実を歌い、独自な歌風を樹てた。爾余の人々もまたそれぞれに子規、左千夫を継承しつつ新風を展開して行った。彼らによって子規の写生説はいちじるしく前進したのである。かくしてアララギ派は、大正五、六年(一九一六・一九一七)のころ歌壇に主流的な位置をもつことになるのである。

短歌革新の功業は主として前記二派の運動に帰するものであるといい得るのであるが、しかし、この他に竹柏会を主宰した佐佐木信綱、直文門に出た尾上柴舟、金子薫園らの功績をも没することはできない。傍流的な立場ではあったが、これらの人々もその青春のいのちをかけて、それぞれに清新調を織って、近代短歌史上に記念塔をうち樹てたのである。

前記『明星』は日露戦争後の自然主義思潮の興隆と共に漸次衰亡の徴を示し出した。そのよう

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

な時期に自然主義風潮に乗って出て来た歌人に、若山牧水、前田夕暮、土岐哀果（善麿）がある。牧水は近代人的悲愁を歌い、夕暮は平面描写を称えて生活現実の断面を歌い、哀果は社会的関心の深い人生に密着した歌を歌った。哀果はこうした方向において新詩社出の啄木と結び、共に生活派の水脈をかがやかせたのである。

以上は明治三十年前後から明治末期大正初期に至る歌壇の動き――近代短歌成立の過程の大概であるが、この期に活躍した前記諸歌人の大部分は、更に大正期・昭和期を通じて第一線的な活躍をし、おのおのその歌境を進展させたのである。

この書で主として扱った作家は、大体明治期に出発してその末期から大正初期までにいろいろな意味で功業をなした人々である。その中で是非入れなければならない人に、反明星に出発した金子薫園、尾上柴舟、その他に窪田空穂、太田水穂、土屋文明、釈迢空などがあるがあまりにも厖大になるので今日は以上にとどめた。

もともとこの書物は雑誌『婦人倶楽部』のために約三十年前に執筆二十九年八月に初版を出して好評を博したものであるが、その後版を起さず久しくなったのだが、その後なお新鮮な解説を保っていることを玉川大学出版部が見つけて、若干の内容のさしかえをして新しく再版することになった。この書の成った頃に生まれた諸君のためにも大いに読まれることを期待するものである。

昭和五十八年一月九日

木俣　修

近代秀歌　目次

はしがき……1
I 短歌革新の旗手たち……11
落合直文……12
与謝野寛……21
正岡子規……35
佐佐木信綱……45
II 浪漫派の驍将……55
与謝野晶子……56
北原白秋……71
吉井勇……92
III 写生派を継ぐもの……107
伊藤左千夫……108
長塚節……126

Ⅳ 自然主義思潮に洗われた歌人……141
若山牧水……142
前田夕暮……158
Ⅴ 生活短歌の開拓者……175
石川啄木……176
土岐善麿……198
Ⅵ 『アララギ』の群星……217
島木赤彦……218
斎藤茂吉……236
古泉千樫……256
中村憲吉……272
Ⅶ 『白樺』の歌人……285
木下利玄……286
初句索引……298

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

近代秀歌

I

短歌革新の旗手たち

落合直文
与謝野寛
正岡子規
佐佐木信綱

落合直文（おちあいなおふみ）

文久元年（一八六一）十一月二十二日、仙台藩の家臣鮎貝盛房の次子として陸前国本吉郡松岩村に生まれた。幼名を亀次郎（のち盛光と改める）と称した。明治七年、仙台市の神道中教院の語学校に入学、中教院の統督であった落合直亮に認められて養子となり、落合姓を名乗った。直亮は本居宣長、平田篤胤の系統に属する国学者であったから、直文は養父のあとを継ぐために国学を志望することになった。十年、伊勢の神宮教院に入学、十四年、東京に出て二松学舎に学んだ。更に十五年、東京大学古典講習科に入学。十六年、直亮の次女竹政と結婚。十七年、歩兵第一聯隊に入営、二十年、除隊とさまざま身辺に事はあったが、研究は続けられた。二十一年、皇典講究所講師となり、上田万年等と言語取調所を創設した。この年、長篇叙事詩、「孝女白菊の歌」を制作して詩家としての名声を博した。二十二年、国語伝習所、第一高等中学校、早稲田専門学校等の講師となり、国文教育に力を致し、国文研究に精進した。二十五年、金子元臣の企画による雑誌『歌学』に参じて、歌論および作品を発表する機会を得た。すなわち、このころからようやく短歌革新の志を明らかにしてゆくのである。「緋縅」の歌によって、緋縅の直文の名を得た時期である。二十六年、本郷区浅嘉町に居を移して、あさ香社を結び、短歌運動の拠りどころとした。あさ香社に集ったものは、ほとんどが二十代の新進気鋭の人で、後に国文学方面に名をなした人々も多いが、歌人としてあらわれ、多くの業績を残した人々に、与謝野鉄幹、服部躬

治、尾上柴舟、金子薫園等がある。三十一年、糖尿病にかかって、第一高等学校教授を辞したが、それ以後は多く病床にあった。三十六年（一九〇三）十二月、病あらたまって死去した。四十二歳。その著書に『萩之家遺稿』（明治三十七年）、『萩之家歌集』（明治三十九年）、『落合直文集』（昭和二年）、『新撰歌典』（明治二十四年）等の他、辞書や国文・文典の教科書等がある。

緋縅の鎧を着けて太刀佩きて見ばやと思ふ山ざくら花

緋縅の鎧というのは、緋の色に染めた革で縅した鎧で、華やかなものである。それを着けて、太刀を佩いて山桜の花を見たいものだと歌ったのであって、今日からみると、とんでもない時代錯誤の精神だと思われるが、この歌の作られた明治二十五年あたりの日本では、青年達はこうした武士的精神というものに対するあこがれをもっていたのである。もちろん、もう鎧などを着る時代ではなかったが、過ぎ去ったむかしの公達の美しい武者姿などにひかれたのである。それに直文は仙台藩伊達家中の門閥の出であったから、一層そうした気分を強くもっていたものと思われる。一種のロマンティシズムということができるであろう。

当時、このような着想の奇抜な、雄壮でしかも華麗な歌は、まことに珍しく新しいものであった。この歌は第一高等中学校（後の一高）の校友会誌に発表されて、大評判となり、世間は直文のことを「緋縅の直文」などと呼んだりした。

近江の海夕ぎり深しかりがねのきこゆるかたや堅田なるらむ

この歌には「湖上霧」という題があるから、いわゆる題詠の一つである。

「近江の湖――琵琶湖には夕霧が深くたちこめている。漠々としたこの霧のなかから雁の声が聞えてくる。雁の声といえば、その方角は堅田のあたりであろうか」という意であるが、近江八景の一つ、「堅田の落雁」を心にもってこう歌ったわけである。ゆるやかな調子で、湖上の静かな夕景を美しく歌ってはいるが、やはり「題」によって詠んだ歌という感じから離れることはできない。近江八景を詠んだ古句に、

七景は霧にかくれて三井のかね

というのがあるが、直文はこの句に刺戟されたのだとも伝えられている。

をとめらが泳ぎしあとの遠浅に浮環のごとき月浮び出でぬ

少女等が泳いでいた海も夕方になった。そして遠浅の海のかなたに浮環のような月が浮かびあがったという歌である。少女達の「泳ぎ」ということと関連をもたせて、月を「浮環のごとき」と譬えたというあたりは、少々たくみすぎているというべきだが、甘美なところをもった当時の清新調である。

父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

明治三十二年の春、病気をした時の歌が十九首あるが、その中の一首である。「お父さん、今朝はいかがですかと手をついて病状を問う子供を見ると、何としても自分は死なれない。死んで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com